



松坂屋 史料室 企画展 Vol.13

松坂屋秘話ヒストリー ～明治維新から大正・昭和～

平成25年3月1日(金)→5月28日(火)

松坂屋は、創業以来400年、歴史上の多くの人物と関わりを持ってきた。

ここでは、幕末から近代にいたる6人の人物、土方歳三、西郷隆盛、夏目漱石、鈴木禎次、竹中藤右衛門、岡田三郎助をとりあげ、松坂屋との由縁をたどる。

土 方 歳 三 一幼少の頃、上野店で丁稚奉公。10代後半は木綿問屋・亀店(上野店支店)に勤務。

西 郷 隆 盛 一上野戦争で、官軍は上野店の2階に本営を構えた。西郷はそこで戦争の指揮を執った。

夏 目 漱 石 一「乙鳥や赤い暖簾の松坂屋」と、上野店を俳句に詠んだ。

鈴 木 禎 次 一東海の近代建築の父。漱石の義弟。松坂屋の店舗の多くを設計した。

竹中藤右衛門 一竹中工務店の14代目。松坂屋、創業家関係の多くの建物を施工した。

岡 田 三 郎 助 一洋画家。小袖、裂地のコレクションで有名。その多くを松坂屋が引き継いだ。

【土方歳三(1835-1869)との秘話ヒストリー】

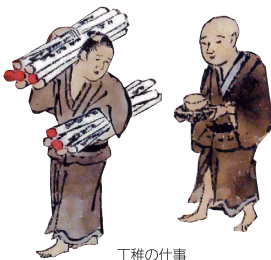
武蔵多摩郡石田村(現東京都日野市)の富農の子、のちの新選組副長・土方歳三が、上野の「いとう松坂屋」へ奉公にあがったのは、弘化2(1845)年のこととされる。数え11歳であった。些細なことで番頭と衝突し、そのまま生家に戻ってしまった。40km近い夜道を、一人で歩き抜いたのである。それから数年を経た嘉永4(1851)年、17歳になった歳三は、今度は上野店の支店である木綿問屋・亀店に勤務した。歳三が松坂屋で生涯を全うしたならば、幕末の歴史は随分と違ったものになっていただろう。



土方歳三

丁稚(平小供)の仕事

呉服店に入店すると、丁稚からスタートするわけだが、松坂屋ではこれを平小供と呼んでいた。最初の2ヵ月ぐらいいは店内に座って、先輩たちの立ち振る舞いを見ていた(これが本当の見習い)。食事とトイレのときにしか立てないので、一番つらかったそうである。このあと煙草番を経て、半年後にはお茶番や店内の使い走りをするようになる。



丁稚の仕事

「東都名所 上野広小路之図」(天保10～13年=1839～1842年)

寛政4(1792)年に新築した「いとう松坂屋」(上野店)を、歌川広重が「東都名所」シリーズの中で画いたもので(呉服店では上野店だけ)、同シリーズの中の佳作とされる。土方歳三が上野店に奉公にあがったのは、弘化2(1845)年なので、ちょうどこの絵の時代にあたる。上野店はこの後、安政2(1855)年の大地震で全焼した。



「東都名所 上野広小路之図」(広重)

【西郷隆盛(1827-1877)との秘話ヒストリー】

幕末維新期の政治家。維新三傑の一人。号は南洲。蛤御門の変、第一次長州征討で軍略家として頭角を現し、勝海舟との接触を機に、佐幕から武力倒幕派へと転身した。薩長連合、王政復古、戊辰戦争を指導し、武力倒幕派主導の維新政権樹立に貢献した。戊辰戦争の最大のヤマ場ともいわれた上野戦争では、いとう松坂屋(上野店)の2階に参謀部をおき、幕府側の彰義隊と相対した。戦争終了後も、上野店を訪れている。



西郷隆盛

上野戦争と松坂屋

江戸進出からちょうど100年目の慶応4(1868)年5月15日、官軍と彰義隊の戦いである上野戦争が勃発した。従業員が菩提寺である願信寺に立ち退いたあと、官軍は上野店の2階に本営を構えた。そのためか、広小路一帯が焼け野原になったなか、上野店だけは焼けずにそのまま残った。5月17日には、官軍の西郷吉之助(隆盛)、橋本実梁少将、熊本藩の細川侯たちが休憩のため訪れ、それを見物に大勢が詰めかけた。



鉄砲の弾が残る看板

官軍の本営

「政府軍の参謀部は上野広小路いとう松坂屋の2階に置かれ」「官軍は上野広小路の呉服店・いとう松坂屋の2階に前線本部を設けて指揮した」(『台東区史』)上野店では、(旧館)南側の隅の西郷が審議した部屋を保存し、後世に伝えていたが、大正12(1923)年の大震災で焼失した。



上野店2階の官軍の本営(再現)





【夏目漱石(1867-1916)との秘話ヒストリー】

「乙鳥や赤い暖簾の松坂屋」

この句は、夏目漱石が明治29(1896)年3月24日に、当時教師をしていた愛媛県松山市から東京市下谷区上根岸町の子規へ送った中の一句である。漱石は、明治33(1900)年にイギリスに留学するまで、正岡子規と深い親交を結び、新進の俳人として活躍した。文豪・漱石は、江戸の町方名主の末子で、生後すぐに里子、2歳のときに養子に出された。明治21(1888)年に復籍し、翌22(1889)年正岡子規を知った。



夏目漱石

赤い暖簾

尾張藩士で俳人としても名高い横井也有(1702-1783)は、俳文集『鶉(うずら)衣(ころも)』の中で、「世に呉服を商ふ家の、入口の暖簾には必ず木綿をこそ用ふれ」と述べている。江戸から明治にかけての呉服屋の暖簾は、紺地に白抜きものが殆どであったが、いとう松坂屋のものは地色が黒と赤であった。そして赤い暖簾は出入口にもなっていた。



松坂屋の暖簾

【鈴木禎次(1870-1941)との秘話ヒストリー】

東海の「近代建築の父」といわれた鈴木禎次は、東京帝国大学工科大学造家学科を卒業後、文部省海外留学生として英仏に学んだ。帰国後、名古屋高等工業学校(現名古屋工業大学)の教授、建築科長となり、同科の基礎を築いた。建築教育のかたわら、幅広い設計活動を行い、近代建築の発展に大きく貢献した。松坂屋の東京、名古屋、大阪の各店舗、伊藤銀行の本支店の殆どが、鈴木的设计である。



鈴木禎次

関東大震災でも倒れなかった上野店

「祖母のすぐ下の妹時子は建築家・鈴木禎次に嫁いている。鈴木は、名古屋の松坂屋本店の前身、いとう呉服店などの設計で有名な建築家である。松坂屋各店の設計も手掛け、関東大震災の時に上野の松坂屋だけがこわれず残ったのだと母(漱石の娘)が何度も言っていたのを覚えている」(松岡陽子マックレイン『漱石夫妻の愛のかたち』朝日新書、平成19年)



関東大震災直後の上野(中央奥が上野店)

【竹中藤右衛門(1877-1965)との秘話ヒストリー】

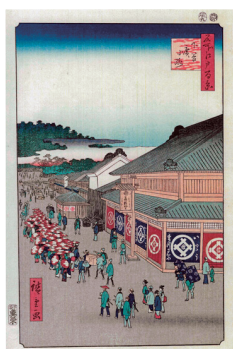
明治42(1909)年、23歳のときに父の急死によって家業を引き継いだ竹中鍊一は、同年、14代藤右衛門を襲名、合名会社(のち株式会社)竹中工務店を設立した。以後、技術開発に力を入れ、大きな実績を挙げた。この竹中工務店(竹中組)と松坂屋との付き合いは「清須越」以来、400年に及ぶ。竹中組の江戸、京都、大阪、いわゆる三都への進出は、いずれも松坂屋がらみの工事から始まっている。内、江戸は「安政の大地震」(安政2年:1855年)、京都は「蛤御門の変」(元治元年:1864年)という歴史的な出来事が背景になっている。



14代竹中藤右衛門

「名所江戸百景 下谷広小路」(安政3年=1856年)

「いとう松坂屋」(上野店)は、安政2(1855)年の大地震で、店も蔵も破損した上、火災で焼失した。この上野店を再建したのが、11代竹中藤右衛門(現竹中工務店)である。棟梁、大工をはじめとするすべての職人を名古屋から連れていき、船で資材とともに乗り込んだ。江戸での初仕事であった。この建て直された上野店を歌川広重が画き、営業再開の9月にあわせて売り出した。



「名所江戸百景」の中の上野店

【岡田三郎助(1869-1939)との秘話ヒストリー】

「婦人像の岡田」といわれ、明治、大正、昭和の三代に亘って画壇に重きをなした岡田三郎助は、時代衣装のコレクターとしても知られる。この岡田の代表作「あやめの衣」(昭和2年)のモデルとなった小袖「納戸縮緬地ハツ橋文様小袖」もそのコレクションの一つで、のちに松坂屋が譲り受け、現在はJ.フロントリテイリング史料館の収蔵品となっている。この「あやめの衣」の翌年に制作された「来信」(昭和3年)にも、史料館の「紫縮緬地檜扇牡丹文様振袖」がつかわれている。



岡田三郎助

紅型(鬱金布地市松枝垂桜鶴燕模様)

昭和9年10月に岡田三郎助から購入した「紅型」の中の逸品。紅型とは、琉球王朝の時代に、王族や士族など特定の階層に用いられた染色の技法をいう。型紙によって防染した型染めと、筒描きの2種類からなる。松の下に枝垂桜(しだれざくら)を配する「垂れ型」の文様で、裾には流水に菖蒲と鶴亀、腰周囲に飛燕を配置した鎖大模様型の紅型衣装である。元は振袖のスタイルで、踊衣装として用いられたものと思われる。色差された桜花は、花心が白く長く表現されており、満開の花のイメージが伝わる。



紅型(鬱金布地市松枝垂桜鶴燕模様)